

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【解説と黙想】

一番大切なこと：神と共に歩む

【教理の解説】

『子どもと親のカテキズム』の間1です。どのカテキズムもそうであるように、最初の問いは信仰の核心を教えると同時に、カテキズム全体の特色を映し出す内容になっています。この間1は、「私たちにとって一番大切なことは何ですか」と問うて、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」と答えます。ウェストミンスター小教理問答が、「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」と教えている内容を、「神さまと共に」という言葉で子ども向けに分かりやすく言い直していると言えます(間2を参照)。また、「歩む」という動きのある言葉と、それと関連して「道」という言葉が全体の構成を貫いていて、子どもたちが生き生きと歩んで成長していくイメージを与えています。

【テキストの解説】

「歩む」というカテキズムのキーワードに合わせて、「光のあるうちに歩きなさい」という言葉を含むヨハネによる福音書12章27～36節が選ばれています。エルサレムに入城されたイエスさまが、まもなく十字架にかけられることを群衆に予告された場面です。イエスさまと父なる神さまとの対話(27～29節)から明らかなおと、イエスさまが十字架の死を遂げることは、神さまの栄光が現されることです。そのことが32

節では「上げられる」と言われており、それはまた、すべての人をご自分のもとへと引き寄せるため、つまり救いのためでした。イエスさまはその救いを「光」と呼ばれ、「光のあるうちに歩きなさい」と言われました。イエスさまを信じて、神さまと共に生きるようにとの招きです。

【黙想】

カテキズムは、子どもたちが「神さまと共に歩むこと」が一番大切なことと教えます。子どもたちが元気に歩いている姿を思い描くことができます。しかし、子どもたちだつて疲れて歩けなくなるときがあるでしょう。子どもだからこそすぐに立ち止まってうずくまってしまうこともあると思います。そのようなとき、まずイエスさまがご自分の道を歩んでくださったことを思い起こします。それも、イエスさまは私たちのところへ歩いてきてくださり、私たちを救い、さらに私たちを神の国へと導くために一緒に歩いてくださるのです。この恵みを知ることで、私たちもまた歩き出すことができるのです。

【子どもへのメッセージ】

神さまと共に歩むことのすばらしさを知ってほしいと思います。それが一番大切なことです。そして、それは、神さまにとつても一番大切で、うれしいことなのです。

(石原知弘)

《参照聖句》 創世記5章24節、6章9節、28章20節、申命記31章6節、ミカ書6章8節、ヨハネによる福音書14章6節、コロサイの信徒への手紙2章6節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問2、18、39、42、56、69、83、ウェストミンスター小教理問答 問1、12、20、ハイデルベルク信仰問答 問1、6、53、74、120

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【説教展開例】

一番大切なこと：神と共に歩む

◇..... 単元のねらい◇

カテキズムの第一問は、一番大切なことは「神さまと共に歩むこと」と教えています。神さまを信じて歩むことのすばらしさを伝えたいと思います。そのためにまず、神さまご自身が私たちと共にいることを願ってくださっており、イエスさまを私たちに与えてくださったということを感じたいと思います。そして、「歩む」というイメージを大切に、子どもたちが神さまと共に生き生きと歩んでいけるような語りかけができればと願います。

「イエスさまの道を歩く」

毎日の生活の中で大切なことはたくさんあると思います。どんなことがあるでしょう。ごはんを食べること、よく寝ること、勉強すること、友だちと仲良く遊ぶこと。これらはどれも大切なことですが、聖書が私たちに教えている一番大切なことは、私たちが神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。考えてみれば、ごはんも友だちも神さまが与えてくださったものです。神さまがおられなければ、私たちは楽しいことも何もできません。神さまを信じて、神さまと一緒に歩いていくことが一番大切なことなのです。

「歩む」と言いました。聖書では、神さまを信じて生きることを、「歩む」、「歩く」と言っています。今日の箇所は35節には、「光のあるうちに歩きなさい」とあります。みんなは毎日どれくらい歩いているでしょうか。学校の行き帰り、家の中でも歩いていると思います。神さまを信じることは、そのように歩いていくことです。いつでもどこでも神さまと一緒に歩むのです。そして、一歩ずつ一歩ずつ前へ進んでいくように、一歩ずつ一歩ずつ成長していくことができ

るのです。

でも、どうでしょうか。ときどき、歩けなくなることもないでしょうか。病気になるったり、足が痛くなったりして、歩けなくなる時があります。そして、そういう体のことだけではなくて、心が痛くて、さびしかったり、苦しかったりして、前に歩けないように感じたりすることはないでしょうか。そういうときには、神さまを信じて歩くということも、難しく感じるのではないのでしょうか。

そのようなときには、イエスさまのことを思い出してほしいと思います。イエスさまは、立ち止まったり、うずくまってしまったりした私たちが、もう一度神さまと共に歩き出すことができるようになるために、私たちのところに来てくださったのです。

今日読んだ聖書の箇所は、イエスさまがもうすぐ十字架にかかって死なれるという場面です。イエスさまは27節で「心騒ぐ」と言われましたが、すぐに「わたしはまさにこの時のために来たのだ」とご自分が何のために世に来られたのかを確信されました。そして、32節で「わたしは地上から上

げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」と言われました。「地上から上げられる」とは、十字架の死を意味していました。それで、「イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである」と書かれています。そして、その十字架は私たちを「引き寄せる」ため、つまり、救うための死でした。このとき周りにいた人たちはまだイエスさまの言葉を理解できませんでした。イエスさまははっきりと、みんなの救いのために自分は死ぬ、そのために来たと告げられたのでした。

ですから、こう考えることができると思います。私たちがイエスさまのところに歩いていく前に、イエスさまが私たちのところに歩いて来てくださったのです。自分は今もう歩けないように思えるときでも、イエスさまが私のところに歩いて来て、助けてくださるのです。これが神さまの恵みです。

そして、イエスさまは、35節で「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と言われました。イエスさまは世の光として私たちの救いとなってくださいました。その光であるイエスさまを信じて、光の子として歩いていきなさいということです。みんなは夜の暗い道を歩いたことがあるでしょうか。光がなければ、目的地に向かってまっすぐに歩いていくことはできません。暗闇の中では、自分がどこにいて、どこに向かっているのかも分からないのです。毎日の生活でも、イエスさまを知らないと、歩いているようでも実はどこに向かっているか分からないのです。でも、世

の光であるイエスさまを知り、信じているなら、まっすぐに歩いていくことができるのです。

また、しっかりと歩いていくためには、「道」が必要です。道がなければ、歩いていくことはできません。イエスさまは、光であると同時に、道であるお方です。このあとで、イエスさまはこう言われました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない」（ヨハネ14章6節）。イエスさまを信じて歩むということは、イエスさまという道を歩いていくということです。イエスさまが私たちの道となってくださって、私たちを父なる神さまのところへ連れて行ってくださるのです。これは、言い方を変えると、イエスさまを信じていれば、いつでもどこでも、必ず道があるということです。いいときばかりでなく、つらいときや苦しいとき、立ち止まってしまったようなときも、イエスさまを信じていれば、そこに道があるのです。そして、そこをまた歩いていけるのです。聖書では、イエスさまを信じる人たちのことを、「この道に従う者」（使徒9章2節）と呼んでいます。イエスさまを信じる人は、イエスさまという道を信じ、イエスさまという道を歩いていく人なのです。

今日から、『子どもと親のカテキズム』を学んでいきます。このカテキズムには、「神さまと共に歩む道」というもう一つの名前が付いています。そして、この後を見ていくと、「第一部 信じて歩む道」、「第二部 教会と共に歩む道」、「第三部 感謝しつつ歩む道」と、すべて「道」という言葉が出てきます。ここには、みんなに神さまと共に道を歩んで行ってほしい、そして、

一步一步前へ進んでいくように、一步一步成長して行ってほしいという願いが込められています。

そのために、神さまがまずイエスさまを与えてくださって、イエスさまが私たちのところに歩いて来てくださいました。その恵みを忘れないでいてください。そして、私たちにとって一番大切なことは、神さまにとっても一番大切なことだということを

知っておいてほしいと思います。実は神さまご自身が、私たちと一緒に歩いていきたい、それが一番大切なことだ、と思っておられるのです。神さまは、みんな一人ひとりのことを大切にしてくださっているからです。

このすばらしい神さまを信じて、神さまと共にこれからも歩いていきましょう。

(石原知弘)

《今週の暗唱聖句》

暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。

(ヨハネによる福音書12章35節)

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例A】

一番大切なこと：神と共に歩む

〈はじめに〉

まず「歩む」を幼稚科では、保育園・幼稚園に通うこと、食べたり飲んだりすること、遊ぶこと、誰かと話すこと、など毎日の生活をする（生きる）ことであると伝える。まだそのような認識を持つことが難しい幼年の場合は、「歩む」は、歩くことそのままに「神さまといっしょに歩く」として話をしてもよい。

〈分級でのお話のすすめ方の例〉

分級としては、ヨハネ12章35節と36節を中心に話す。

「暗闇」と「光」の対比で、幼少の子どもたちに状況がわかるように、夜と昼に置き換えてイメージを持たせる。

「光のあるうちに歩く」を説明する準備として、エレミヤ書13章16節などが有益な参照箇所の一つである。

「光のあるうちに歩く」ことは、道を見ながら歩くことができるが、「暗闇の中を歩く」ことは、道が見えないので、「自分がどこへ行くのか分からない」状態になる。「光の子」は、道がわかるように「光のあ

るうちに歩く」者であり、「光を信じる」者である。

「光」とは誰のことか、を子どもたちに問い、考える時間を与える。「光のあるうちに歩く」ことは、「光」が一緒であること。だから、「光」は、神であるイエスさまであり、イエスさまと一緒に居てくださることが、光の中を歩くことである。それは、すなわち光である神イエス・キリストを信じることである。

しつもん1

「光の子」はどこを歩きますか？

- ① 暗いやみの中
- ② 光のあるところ

しつもん2

わたしたちは「光の子」ですか？「光」はだれのことでしょうか？

しつもん3

あなたが「光のあるうちに歩く」とき、だれがいっしょにいてくださると思いますか？

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例B】

一番大切なこと：神と共に歩む

イエスさまが十字架におかかりになる時がいよいよ近づいて、弟子たちに真剣にお話しになったことが今日の御言葉に記されています。イエスさまの十字架は、人々を救う業に失敗して殺されてしまったことを意味しません。周りの人たちはそう思ったに違いありません。なぜなら、十字架は犯罪人を処刑する方法だったからです。けれども、イエスさまの十字架こそ、罪人の罪を赦すために神さまが用意された救いの道でした。私たち罪人が、罪を赦されて、神の子として明るい光の中を生きることができるよう、イエスさまは十字架に上られます。自分が死ななければならないことを承知で、神さまの栄光のために十字架を背負って歩まれます。天からの声は、そのイエスさまのお姿に神の栄光が現れると証言します。

イエスさまは「光のあるうちに歩きなさい。……光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と呼びかけておられます。光のない暗闇を歩いたことがありますか？学校や塾の帰りに薄暗い夜道を行かねばならないことはあるかも知れませんが、通りには街灯がついていたり、住宅の灯りがありますから真っ暗ではありませんね。「手に触れるくらいの闇」という表現があります。自分の手が見えないくらいの真っ暗闇です。道路どころか足元も見えませんが、怖くて一歩も踏み出すことができなくなります。

イエスさまはそんな暗闇に神さまが送っ

てくれた光です。悪いことばかりが続いて、人の心も信じることができなくて、毎日が真っ暗に思えるような時にも、イエスさまがそばにいて光でいてくれます。

では、イエスさまを十字架にかけた人々にはそれがわからなかったのでしょうか。残念ながらわからなかったのです。神さまを信じない人の心は、罪で覆われて光を通さなくなってしまっています。イエスさまが十字架で死ぬことは神さまのご計画であつたとはいえ、神さまを信じない人の心がイエスさまを十字架に送ったのです。だから、「光を信じなさい」とイエスさまは言われます。神さまを信じて、イエスさま救いの光であることを信じなくては、明るい光のもとで歩き続けることはできません。

しかし、そんな罪人の暗い心に、イエスさまの十字架が光を灯してくれます。イエスさまの十字架が果たされた時、神さまの救いが人の心に届きます。光の差し込まなかった暗闇に、イエスさまの愛が暖かな光を灯します。そんなふうに神さまの力で、人はイエスさまの光をいただいて、心から信じて歩むことができるようになります。そして、本当に信じている人は光の子です。神さまの光によって明るくされた人は皆、光の子になります。光の子は自分の心が明るいだけではありません。まわりを明るく照らすことができます。その人の内でイエスさまが明るく輝いているからです。

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例C】

一番大切なこと：神と共に歩む

1. 人の生きる目的は「神の栄光を表すこと」だとウェストミンスター小教理問答第1問は述べています。「神の栄光」とは何でしょうか。人はどのように「神の栄光」を表すことができるのでしょうか。

答えは、イエス・キリストです。神の子イエス・キリストこそが神の栄光であり、人となられたキリストにそれが表れています。ですから、イエス・キリストを信じて、その光に照らされて、キリストに従う道を歩む人に神の栄光は表れます。

2. 神またはキリストが「光」と表されるのは何故でしょう。旧約聖書に思い当たる箇所があれば挙げてみましょう。例えば、創世記1章3節、イザヤ書9章1節、60章1節、詩編119編105節、など。

また、ヨハネによる福音書の1章1節から14節を読んでみましょう。

ここで、キリスト＝言葉＝命＝光、というつながりが見えてきます。これがどのような意味をもつのか考えてみましょう。

3. イエス・キリストが光としてこの世界に来られたのは、世界が暗闇であったからです。この世の暗さとは一体どんな様子でしょうか。あなたはどのように感じていますか。また、聖書はどのように語っているでしょうか。上で参照したヨハネ福音書1章を参照してください。他にも思い当たる箇所があるでしょうか。

4. イエス・キリストが神の光として世に来られたのに、人々はイエス・キリストをそうとは信じないで十字架につけました。何故でしょうか。

5. では、罪人はどのようにしてキリストを光と信じることができるのでしょうか（答えは分級展開例Bを参照）。

6. キリストを信じて「光の子」とされた時、あなたはどのようにその光を放つことができると思いますか。「光の道を歩む」とはどういうことでしょうか。

4月～6月

【分級展開例D】

「せいしよめいもくづくし」をうたおう

聖書は全部で66巻の文書が集められてできています。馴染みあるものも、そうでないものもあるかもしれません。けれども聖書全体が神の言葉ですから、様々な聖書の箇所を読むのが大切です。また、聖書の文書の順番を覚えておくと、それぞれの歴史的な位置付けや、内容について知るための手助けになります。聖書に親しむために、聖書の文書の書名を覚えましょう。

下の歌詞は、「鉄道唱歌」（汽笛一声新橋を）のメロディーに合わせて歌います。

楽譜は「ふくい子どもさんびか」（いのちのことば社）に掲載されていますので、参照ください。なお下記の歌詞は、新共同訳聖書の書名に合わせて、変更しています。

19 せいしよめいもくづくし

Books of the Bible
SEIMATSU KIMURATetsudōshōka
UMEWAKA ŌNO

旧 { そ う、しゅ つ、レ ビ、み ん、し んめ い き、
イ ーザ ヤ、エ レ、あ い、エ ゼ、ダ ニ ル、
新 { マ ー タ イ、マ コ、ル カ、ヨ ハネ で ん、
ヤ ー コ ブ、ベ ー ト ロ、ヨ ハネ、ユ ダ、

ヨ ー シ ア、し し、ル ツ、サ ム、れ つ おう、
ホ ー セ ア、ヨ エ、ア モ、オ バ、ヨ ナ、ミ、
し と、ロ マ、コ リン ト、ガ ラ テ ヤ しよ、
ヨ ハネ の も く し ー、に しゅう し ち(27)

れ きだ い、エ ズ、ネ ヘ、エ ステ ル しよ、
ナ ー ホ ム、ハ バク ク、セ フ、ハ ガ イ、
エ ー フェ ソ、フィ、リ、コ ロ、テ サ ロ ニ ケ、
きゅう し ん りょう や く あ わ せ れ ば

ヨ ブ、し ー、し んげ ん、コ ヘ レ が か
セ カ リ ヤ、マ ラ キ ー、さ んしゅう く (39)
テ モ、テ ト、フィ、レ、モ、ン、ヘ ル ー プ ル しよ
せ いしよ の か ー ズ は ろ くしゅう ろ く (66)

きゆうやく	旧約聖書	しんやく	新約聖書
そう	創世記(そうせいき)	またい	マタイによる福音書(またいによるふくいんしよ)
しゅつ	出エジプト記(しゅつえじぶとぎ)	まこ	マルコによる福音書(まるとによるふくいんしよ)
れび	レビ記(れびき)	るか	ルカによる福音書(るかによるふくいんしよ)
みん	民数記(みんすうき)	よはねでん	ヨハネによる福音書(よはねによるふくいんしよ)
しんめいき	申命記(しんめいき)	しと	使徒言行録(しとげんこうろく)
よしゅあ	ヨシュア記(よしゅあき)	ろま	ローマの信徒への手紙(ろーまのしんとへのてがみ)
しし	士師記(ししき)	こりんと	コリントの信徒への手紙(こりんとのしんとへのてがみ)一、二
るつ	ルツ記(るつき)	がらてや	ガラテヤの信徒への手紙(がらてやのしんとへのてがみ)
さむ	サムエル記(さむえるき)上、下	えふえそ	エフェソの信徒への手紙(えふえそのしんとへのてがみ)
れつおう	列王記(れつおうき)上、下	ふいり	フィリピの信徒への手紙(ふいりびのしんとへのてがみ)
れきだい	歴代誌(れきだいし)上、下	ころ	コロサイの信徒への手紙(ころさいのしんとへのてがみ)
えず	エズラ記(えずらき)	てさろにけ	テサロケの信徒への手紙(てさろにけのしんとへのてがみ)一、二
ねへ	ネヘミヤ記(ねへみやき)	ても	テモテへの手紙(てもてへのてがみ)一、二
えすてるしよ	エステル記(えすてるき)	てと	テトスへの手紙(てとすへのてがみ)
よぶ	ヨブ記(よぶき)	ふいれもん	フィレモンへの手紙(ふいれもんへのてがみ)
し	詩編(しへん)	へぶるしよ	ヘブライ人への手紙(へぶらいじんへのてがみ)
しんげん	箴言(しんげん)		
コヘレ	コヘレの言葉(こへれどのことば)		
がが	雅歌(がが)		
いざや	イザヤ書(いざやしよ)	やこぶ	ヤコブの手紙(やこぶのてがみ)
えれ	エレミヤ書(えれみやしよ)	べとろ	ペトロの手紙(べとろのてがみ)一、二
あい	哀歌(あいが)	よはね	ヨハネの手紙(よはねのてがみ)一、二、三
えぜ	エゼキエル書(えぜきえるしよ)	ゆだ	ユダの手紙(ゆだのてがみ)
だにる	ダニエル書(だにえるしよ)	よはねのもくし	ヨハネの黙示録(よはねのもくしろうく)
ほせあ	ホセア書(ほせあしよ)	にじゅうしち	27巻
よえ	ヨエル書(よえるしよ)	きゆうしんりょうやく	旧新両約合わせれば聖書の数は66
あも	アモス書(あもすしよ)	あわせれば、せい	
おぼ	オバデヤ書(おぼでやしよ)	しよのかずはろく	
よな	ヨナ書(よなしよ)	じゅうろく	
み	ミカ書(みかしよ)		
なほむ	ナホム書(なほむしよ)		
はばく	ハバク書(はばくしよ)		
ぜふあ	ゼファニヤ書(ぜふあにあしよ)		
はがい	ハガイ書(はがいしよ)		
ぜかりや	ゼカリヤ書(ぜかりやしよ)		
まらき	マラキ書(まらきしよ)		
さんじゅうく	39巻		